

「はじまり、はじまり」――。北海道電力泊原発の運転差し止めや廃炉などを求めた訴訟の原告団長を務めた北海道岩内町の斉藤武一さんが四月二十九日、七〇歳で亡くなった。斉藤さんと言えば、わかりやすく原発の問題点を伝える自作の紙芝居。その紙芝居はお決まりの「はじまり、はじまり」でスタートした。元保育士らしい優しく、穏やかな口調で反原発を訴えかけた斉藤さんの在りし日が目に浮かぶ。

六月一〇日には、札幌市内で斉藤さんへのぶ会が開かれ、多くの人が集まった。配布された資料では、斉藤さんの人生を振り返り、メルクマールごとに長女の庄木汐里さんのコメントが盛り込まれた。

それによると、斉藤さんの反原発活動の原点とも言える岩内港での海水温調査は一九七八年、斉藤さんが二五歳のときに始まった。泊原発が稼働するおよそ一〇年前。「平均値が出せるとされる三〇年は最低、海へ通い、海水温の測定をしなければならぬ」と考える。三〇年間、海へ行くことは到底不可能だと周囲から反対された。不可能だと思ふ自分と、不可能を可能にしてやると燃える自分がいた。

この強い気持ちで斉藤さんを動かす続け、斉藤さんは岩内の厳しい冬も日々海水温を取り続けた。三二歳のときには冬の防波堤でバイクごと横倒しになり、命を落としか

反原発 ある活動家の死

けたこともあったという。たとえ岩内が南国の地だったとしても、常人には到底なれない地道な作業。それを成し遂げた意志の強さには、ただただ驚嘆するしかない。

◇ 斉藤さんが原告団長を務めた泊原発訴訟は昨年五月、札幌地裁（谷口哲也裁判長）が「津波による事故で原発から半径三〇キロの範囲内に住む四四人について生命や身体といった人格権を侵害するおそれがある」などとして、北電に一〇三号機の運転差し止めを命じた。提訴から一〇年以上が経過したにもかかわらず、立証を終えられない北電側の姿勢も非難。廃炉こそ認められなかったが、津波対策の不備を主な理由に運転差し止めを命じた司法判断は初めてだった。

津波に遭い、炉心溶融（メルトダウン）が起きた東京電力福島第一原発事故を考えれば、脆弱な津波対策が許されるはずもない。画期的な司法判断とも言えるが、市民感覚に沿ったまっとうな判決だったとも言える。判決を受け、斉藤さんも「原告の一人として、（勝訴判決を）素直に喜びたい。原発のない北海道を目指していける。当たり前の判決が、当たり前に出たことが本当にうれしい」と語っていた。

原子力規制委員会による泊原発の審査では、北電が想定していない海底活断層があ

ると認定され、防潮堤が壊れて津波に耐えられない可能性も浮上している。原子力規制委の審査はこの津波対策などの審査が残っており、いまま再稼働のメドは立っていない。それにもかかわらず、藤井裕社長（当時）は今年五月、電力料金の値上げを発表した記者会見で、「（一〇三号機のうち）一基でも動いていれば、（値上げ幅は）圧縮に働いた。一日も早い再稼働を目指すが、これが責務」などと発言。料金値下げと引き換えに早期再稼働を進めようとする同社の姿勢に対し、斉藤さんが存命ならば、どうコメントしていただろうか。

◇ しのぶ会では「今後ますます斉藤さんのような気骨と知識のある活動家の存在は貴重であり、必要な存在だったと思う」などと惜別の声が多数寄せられた。

◇ 斉藤さんが所属していた岩内原発問題研究会の佐藤英行さんは、紙芝居の締め言葉を挙げて、「めでたし、めでたし」の社会をつくっていくのは私たちである」と述べ、みなが斉藤さんの遺志を継ぐよう訴えた。

これからの日本や世界を「めでたし、めでたし」とするため、何をすべきなのか。天国の活動家から、我々一人一人が問われている。

△陽▽